大阪市 中央区わがまちガイドナビ vol.10

大衆のまちミナミと粋(すい)のまち道頓堀

大衆を育み大衆に愛された千日前、難波と粋のまち道頓堀のミナミの文化とは

市販のガイドブックとはひと味違う、区民がつくった「ガイドナビ」

「区内には地元の人だけが知ってる魅力がいっぱい、ぜひ伝えたい！」 市販のガイドブックとはひと味違う、区民が調べ、歩き、聞き、まとめたわがまち自慢、それが**「中央区わがまちガイドナビ」**。ご家庭では親から子へ、ご近所ではお隣さんから、もちろん学校でも、わがまちの魅力を口から口へと伝えて行くきっかけになればと願っています。

「中央区未来わがまちフォーラム」は、区民自らがまちづくりに取組むために設立された団体で、平成18年度から、区の魅力向上や課題の克服等に向けて活動しています。平成20～23年度までに**「ガイドナビvol.1～8」**を作成。今回、シリーズ最終回として発行する**vol.9～10**の特集はミナミ。話し合いの中では、「個性がなくなってきたなあ～」との声も。行きたくなる、連れて行きたくなるミナミであってほしい。このガイドナビを持って、実際にまちを歩き、もっと中央区を知ってもらいたい！」作成メンバーの何よりの願いです。「おもてなし」の心で、親から子、孫に伝えていけるよう、ぜひご活用ください。

vol.1 食べて、歩って、くつろいで 馬場町市場、高津宮、空堀の路地とまちづくり
vol.2 祭がつなぐ、人・まち・歴史 神農さんと生国魂さんのお祭りと伝承
vol.3 西横堀川跡界隈をたずねて 蔵、いのまち、大阪の源流へ
vol.4 大阪城前の地、森ノ宮・玉造 上町台地の東端、玉造の起源から現在に至るまちづくり
vol.5 受け継がれる城下町文化 難波の発祥の地～大江地区「北大江・中大江地区編」
vol.6 堺の町 難波近郊周辺の町人の暮らしと文化 堺「南大江編」
vol.7 人モノ、富が集まり、文化と人を育む 北船場・北浜から鎗屋町を中心に
vol.8 日本の商いと、上方文化の発祥の地 中寺町・清水谷・鎗屋町から長堀通」を中心に

▲発行済みの中央区わがまちガイドナビvol.1～8

区民ガイド「まちのすぐれもん」

ガイドナビを手にまちを案内するガイド役、それが**「中央区まちのすぐれもん」**です。紙面の限られるガイドナビにないふか～い話から、最新情報まで、区民ガイドが楽しくご紹介します。

ガイドナビで紹介されていない地域でもOKです。他にも、趣味や特技を活かした講座など、暮らしと地域を盛り上げる活動のお手伝いにもご活用ください。区民が気軽に使うことのできるしくみです。お問合わせお待ちしています。また区内の魅力を発信したい方、地域活性化にご協力いただける方を、新たな**「すぐれもん」**として募集中です。自薦、他薦問わずお待ちしています。

発行・問合せ　発行：中央区未来わがまちフォーラム
中央区未来わがまちフォーラム推進委員会
大阪市中央区市民協働課　06-6267-9832
平成25年3月発行　編集：街角企画株式会社

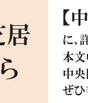
※本文・写真・地図等の無断掲載・複製を禁じます。
※平成25年3月1日現在の情報を掲載しています。

vol.10 大衆のまちミナミと粋(すい)のまち道頓堀

大衆を育み大衆に愛された千日前、難波と粋のまち道頓堀のミナミの文化とは

今宮戎神社の参道と墓地から芸能と映画のまちへ発展した千日前、難波と五座を中心とした芝居街を起源に発展した粋(すい)のまち道頓堀。流行をリードしてきたミナミのこれまでとこれから

【中央区史跡文化事典】に、詳しい解説があります。※本文中にも注釈で案内しています。中央区役所で配付していますので、ぜひ手にとってご覧ください。



お参りのまちから歓楽街へ

千日前

今宮戎につづく参道のにぎわいが、明治初めの再開発で、一気に大歓楽街へ。一帯を焼失させた南の大火を乗り越え発展。

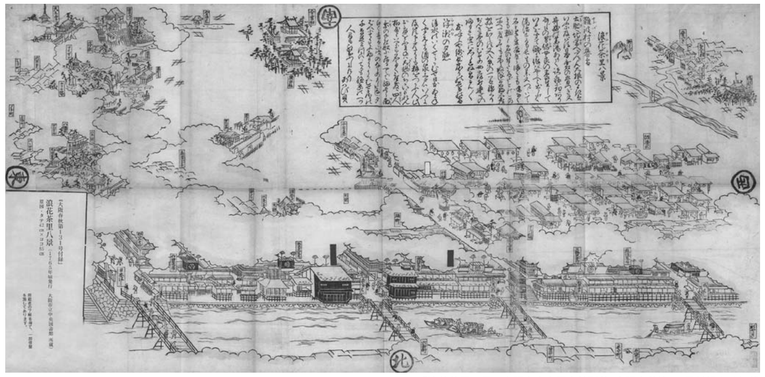
お参りのまち、千日前

千日前という地名は、お参りに由来します。実は、江戸時代、大きな墓地があり、そこに眠る霊を鎮めるために、千日ごとに念仏供養をするという千日回向(えこう)が行われていたのです。お寺は、法善寺や竹林寺。千日寺と呼ばれていました。

千日前の歴史を変えた大火災、「南の大火」

千日前の歴史について尋ねると、多くの人が口にするのが「南の大火」。明治45(1912)年、難波新地の銭湯・百草湯の煙突から出た火の粉が、近くにあった貸座敷の遊楽館の藁葺き屋根に燃え移り、強風にあおられて大火災となりました。焼失したのは、千日前一帯から谷町の生國魂神社あたりまで。約5,000戸が被災し、貸座敷、活動写真館、寄席など多数の商業施設も焼失しました。

この火災をきっかけにつくられたのが、今では上空を阪神高速道路が覆う千日前通。延焼を防ぐための火除け地の確保と、市電の軌道敷設のために建設されたのです。これにより地理的に千日前は南北に分断されることとなりますが、商業施設は次々と再建され、千日前はにぎわいを取り戻します。以降は以前にも増して、大規模な映画館や演舞場が集まる歓楽街としての性格を濃くしていきます。



『浪花茶里八景』大阪市中央図書館所蔵　大阪春秋第131号付録より転載

墓地から一転、一大娯楽ゾーンへ

上の図にもあるように、茶屋や見世物小屋が集まっていた現在の千日前の一部にあたる坂町は、南地五花街の一つに数えられるほどの賑わいを見せていましたが、一気に繁華街へと変わったのは、明治時代に入ってからの開発がきっかけ。大きな墓地が阿倍野に移転。興行師の奥田弁次郎が跡地を商業地として開発しました。そして、明治18(1885)年の阪堺鉄道(南海電鉄の前身)難波駅開業後は一気に人通りが多くなりました。

明治45(1912)年には「南の大火」があったものの、南海鉄道の出資によりテーマパーク「楽天地」が建設され、さらににぎやかに。楽天地は、複数の劇場とメリーゴーランド、ローラースケート場、水族館、展望台などを備えた総合娯楽センターでした。

その楽天地は昭和5(1930)年に営業不振で閉店したものの、2年後には跡地に大阪歌舞伎座ができ、その後は千日デパートになるというように、めまぐるしく移り変わりました。この頃は、近隣に自転車を預かる店があり、たくさんの市民が自転車に乗ってやってきて、映画や芝居を見たとのこと。まさに、庶民の娯楽ゾーンでした。

千日デパートは、昭和47(1972)年の火災後、取り壊され、デパート「プランタンなんば」に。現在は「ビックカメラ」となっています。

大阪歌舞伎座（千日前歌舞伎座）
大阪市都市工学情報センター所蔵

「南地演舞場」
大阪春秋 No. 131より

今宮戎につづく戎橋

観光名所ととして有名な戎橋。橋が架かったのは、道頓堀川が開削された直後の17世紀はじめ頃。名前の由来には、今宮戎神社との関係が指摘されています。一時は、橋の南詰にあやつり芝居小屋があったことから、「あやつり橋」とよばれたこも。幕末期には、江戸幕府が「戎」という外国人をさげすむ言葉の使用を禁じたため、一時的に永戎橋と改名されましたが、わかりにくいという理由で明治時代に入ってから再び戎橋の名に戻りました。

初代戎橋は木橋で、周辺の町が維持管理・費用負担をする町橋でした。平均すると14、5年に1回、架け替えられ、負担は軽いものではありませんでした。明治11(1878)年に鉄橋に、大正14(1925)年には鉄筋コンクリートの橋になりました。その後、橋の舗装をレンガタイルにするなどのリニューアルを経つつ長く使われましたが、老朽化が進んだため、デザインコンペを実施。平成19(2007)年に現在の円形の橋上広場やスロープをもつ橋が完成しました。

欄干のデザインに「コテ」が取り入れられているのはご存じですか？

縁を結ぶ取組みが話題の戎橋筋商店街

戎橋から千日前通を超えて髙島屋に至るアーケード街が戎橋筋商店街。ここでは、「三世代交流」をコンセプトに様々な取組みが実施されています。例えば「えびすばし博」、うどんやさんと昆布やさんがタッグを組んで美味しい出汁の取り方を教えてくれたり、テレビにも取り上げられたナイトツアーなど、商店街で楽しく学んだり、体験してもらおうという企画。参加店は戎橋筋商店街のみならず、ミナミの他の商店街の有名店も。ミナミ全体がコラボレーションし、新しいミナミを多世代に発信しています。

「人もまちも生き物、気持を込めて次の世代へつなげていくことが大切」と、明るく語るのは戎橋筋商店街振興組合理事長の池上さん。

戎橋筋商店街振興組合
理事長の池上さん

えびす橋博公式パンフレット

芝居で繁栄、映画を初上映

芸能と大衆文化

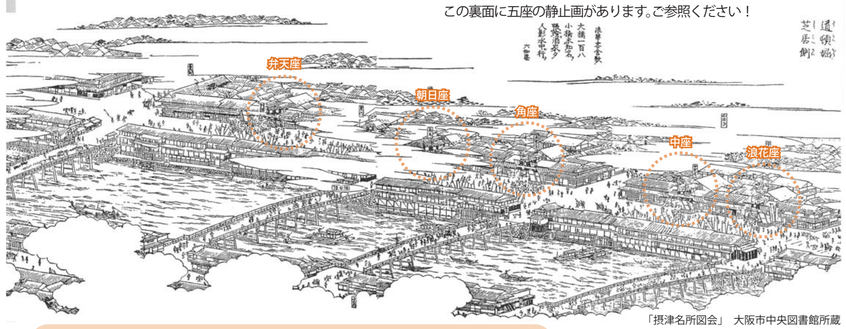
ミナミは長く大阪の文化の中心地。芝居に映画と、旦那衆から家族連れまで、幅広い層、幅広い世代に親しまれてきました。

道頓堀五座を中心ににぎわった芝居街の街並み

CG映像やデジタル・コンテンツなどの可視化技術によって都市景観の変遷を調査・研究している関西大学大阪都市遺産研究センターが、失われた道頓堀五座の風景を静止画と動画で再現しています。

とくに動画では五座だけでなく道頓堀通りを移動しながら周辺の店舗などの解説も入る凝ったつくり。ぜひ一度ご覧ください！

関西大学大阪都市遺産研究センターHP
→http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/osaka-toshi/index.html
「可視化プロジェクト」→「CGによる大阪都市景観の復元」をクリックすると見ることができます。
この裏面に五座の静止画があります。ご参照ください！



「摂津名所図会」　大阪市中央図書館所蔵

日本のブロードウェイ「道頓堀」

道頓堀は、「食い倒れ」のまちとして有名で、現在も、老舗から話題の店まで、幅広く飲食店がひしめきあっています。実は、これらの飲食店の起源は芝居茶屋。当時の芝居は朝早くから夜遅くまでかかるのが一般的で、幕間では茶屋で過ごす人も多かったそうで、閉幕後にも、ひいきの役者を呼び酒宴を行うなど、当時の道頓堀は一日中華やかでした。

この芝居街の中心となったのが、道頓堀五座。浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座です。いずれも江戸時代には違った名称で、浪花座は人形浄瑠璃「曽根崎心中」が初演された「竹本座」、中座は「中の芝居」、角座は回り舞台という舞台装置を備えた「角の芝居」、朝日座は「角丸芝居」、弁天座は「竹田の芝居」で、それぞれ江戸時代後期から明治時代はじめまでに火災で焼失し、再建・改称されています。近代以降は映画上映なども取り入れながら営業されていましたが、平成19(2007)年の角座の廃座をもって、残念ながら五座の名を冠する劇場は姿を消してしまいました。

日本初！ 千日前は映画興行発祥の地

日本で初めて映画興行が行われたのは、ほかならぬミナミ。

現在なんばマルイ、TOHOシネマズが入っている東宝南街ビルの場所に、明治21(1888)年南地演舞場という歌舞練場ができました。この南地演舞場で、明治30(1897)年に入場料をとって映画が上映されたのが日本初の映画興行。当時は、撮影と映写の両方ができるシネマトグラフという機械によって上映されていました。

昭和13(1938)年に南地演舞場は南街映画劇場になり、昭和28(1953)年に阪急の小林一三の企画で南街会館が建設されたのですが、「この地が映画興行発祥の地だということを知らずに会館建設を企画した」との彼の文章が刻まれたレリーフがなんばマルイの1階エレベーター横に残っています。

映画が一般に広まった当初は、映画と演劇を組みあわせた連鎖劇も人気でした。ミナミでは芦辺劇場や敷島劇場、楽天地で上演されていました。

ところで、この発祥地というエピソードは単なる昔話に終わるものではありません。平成17(2005)年、南地演舞場での映画興行を顕彰するために精華小劇場（もと精華小学校）を会場にして「大阪ミナミ精華映画祭」が開催されました。

連鎖劇が製作された三友倶楽部

翌年には「大阪・ミナミ映画祭」と名前を変えて、地元商店街や住民などを巻き込み、会場を増やしながら、以後毎年10月に開催されています。映画祭で上演される映画は、過去に好評だったものや地元の意見を考慮して決めているとのこと。このイベントを通じて、かつて劇場の街としてにぎわったミナミが映画を愛する人であふれる街になるよう、ミナミの住民、団体が協力しあって取り組んでいます。

台所まわりのことなら 千日前道具屋筋！

千日前道具屋筋はもともと千日前から四天王寺や今宮戎神社への参道にあたり、古道具屋が立ち並んでいました。明治15(1882)年に「道具屋筋」という名前がついたようです。近くにあった金比羅で相撲が行われていたため人が集まり、店も集積したと言われています。大正時代、単なる古道具屋街から仕事に使う道具の専門店街に変わりはじめ、道具のレンタル業（賃貸し）を営む店も出現しました。昭和に入る頃には飲食店の道具を売る店が目立つようになり、現在の道具屋筋の姿へとつながります。余談ですが、大阪劇場で美空ひばりが出演したときは道具屋筋まで行列ができていました。

厨房機器・調理器具のお店を営む千田さん

最近では道具を売るだけでなく、厨房設備全体のプロデュースまでする店もあり、道具屋筋は進化し続けています。

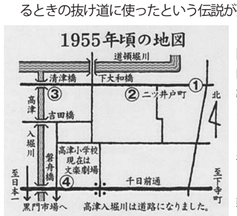
「まちを良くするためには地元住民の意見を取り入れた『人が集まるまちづくり』が大切です」と、千田さんよりお話を伺いました。

漫才ブーム到来、まちは観客で大にぎわい！

映画ブームの後、ミナミを盛り上げたのが漫才ブーム。1980年代、東西実力No1といわれた横山やすし・西川きよしを筆頭に、漫才ブームが到来。当時、売れっ子漫才師たちは毎日のように東京-大阪を移動、テレビ・ラジオ・地方営業と大変なスケジュールの中でなんば花月の高座に出演していました。今いくよ・くるよやオール阪神・巨人など大人気漫才師を目当てになんば花月へ観客が殺到、立ち見でも入りきらないこともあった程大変なにぎわいをみせていたそうです。

大阪名物「二ッ井戸」の復活！

江戸時代から名所として知られていた「二ッ井戸」が国立文楽劇場の前にあります。長方形の井げたを真ん中で2つに仕切った井戸で、以前から片方は水がなく、真田幸村が大阪城から脱出するときの抜け道に使ったという伝説が残っています。



←金田さん提供

当初は道頓堀川の東（左図の①）にありましたが、明治22(1889)年の道路拡張で井戸を埋めることになり、近隣の粟おこし屋「津の清」の主人がその一部を店頭に移設しました（②）。戦後に「津の清」が移転したのにともない井戸も移動しましたが（③）、「津の清」を継ぐ「つのせ」が堺市に移転するときに井戸は埋められてなくなりました。これを残念に思った住民や企業・団体が協力して、平成24(2012)年4月に国立文楽劇場前に井戸を復元したのです（④）。今後、この町で古くて新しい名所となっていくでしょう。

「摂津名所図会」　大阪市中央図書館所蔵

発信しつづける

これからのミナミ

歴史の重みをふまえながら、ミナミはさらに前進しています。見据えるのは、大阪や日本にとどまらず、世界！

良き時代の面影残す、法善寺横丁と浮世小路

水かけ不動が有名な法善寺、緑の苔に包まれたお不動さんは長い間人々が願いを込めてお水をかけた歴史そのもの。法善寺は空襲にて被災しましたが、お不動さんだけは残ったとのこと。

この一角には石畳の静かなたたずまいの横丁があります。もともと法善寺の境内にあった興行小屋や露店が常設化され、市街地となり、できあがった飲食店街、「法善寺横丁」です。かつては特ににぎやかだった法善寺裏の路地は極楽小路と呼ばれ、戦時中に小説家の長谷川幸延が『法善寺横町』（書名は「横丁」ではない）を発表したことで、このあたりが法善寺横丁と呼ばれるようになったのです。法善寺横丁と道頓堀の間には人が1人通れる程の浮世小路があり（昔は今の倍の道幅）、江戸から昭和初期の大阪の雰囲気が描かれています。

法善寺横丁を有名ならしめた近年のできごとは火事。平成14(2002)年と平成15(2003)年の2度の火災で、店舗が密集している法善寺横丁は多くが焼失。趣豊かな狭い路地は、現代の建築基準法に適合せず、再建は不可能かと思われました。そんな中、従来の街並みの再現を求める声が、多方面からあがり、「連担建築物設計制度」の適用に併せて建築協定を締結することで風情ある街並みが復活することとなりました。締結後には法善寺横丁の風情・景観を残し安心・安全なまちなみを再建するとともに、皆が協力しながら守り続けていくことを盛り込んだ「法善寺横丁まちづくり憲章」が定められました。

地域の誇り、もと精華小学校

もと精華小学校は、第2大区第14番坂町小学校として明治6(1873)年開校、明治33(1900)年に大阪市立精華尋常小学校と改称され、平成7(1995)年に122年の歴史をもって閉校しました。その後、精華小学校のこれからについては、地域住民や商店街の人々によって話し合われています。

平成16(2004)年に精華小劇場として活用、精華生涯学習ルームが設けられ、平成21(2009)年には50年振りに「精華盆踊り」が復活、閉校後も地域の人々に親しまれ、愛されつづけてきました。

復活！精華盆踊り大会

豊かな食文化をもつまち、道頓堀

料理店を営む佐藤さん

「ミナミの本当の活性化には食文化が欠かせない」と語るのは、ミナミで料理店を営む佐藤さん。「豊かな味覚がなければ、豊かな食文化は育まれない、豊かな食文化の中で楽しんでもらえるミナミでありたいし、インスタント食品の「袋」の味ではなく、暖かな家庭の「お袋」の味を伝えたい」ともお伺いしました。

水辺で楽しむ！とんぼりリバーウォーク

ミナミの新名所、「とんぼりリバーウォーク」には行かれましたか？平成16(2004)年に整備された、道頓堀川の水辺の遊歩道です。道頓堀川は護岸が嵩上げや水質の汚濁のためにまちと隔たった存在となっていましたが、水辺を楽しめるスポットとなりました。

現在は東は堺筋、西は御堂筋を越えて新戎橋を過ぎたあたりまでの区間と、湊町リバープレイスが近い四ツ橋筋から浮庭橋周辺までの区間で川沿いを歩くことができます。この遊歩道が親しみのもてる場所となるように愛称の募集がおこなわれ、1004件の応募の中から選ばれたのが「とんぼりリバーウォーク」という名称。2012年には道頓堀をブラッとするという意味のロゴマークも募集され、「とんブラ」という字を使ったロゴでも親しまれています。遊歩道では地元団体、企業、学生、行政などが企画する数々のイベントが実施されています。イルミネーション、音楽イベント、フリーマーケット、ステージ、物販・飲食イベント･･･毎週のように何かが催されています。

ミナミの歴史

1612(慶長17)	安井道頓、梅津川の開削着工。道頓堀川誕生へ
1622(元和8)	木橋の心斎橋ができる
1653年(承応2)	五座がそろう
1870(明治3)	千日前墓地が阿倍野へ、千日前の開発が始まる
1873(明治6)	鉄橋の心斎橋ができる
1885(明治18)	阪堺鉄道(南海電鉄の前進)難波駅開業
1897(明治30)	日本で初めて映画興業が行われる
1909(明治42)	石橋の心斎橋ができる
1912(明治45)	南の大火 発生
1913(大正2)	「楽天地」竣工
1932(昭和7)	「大阪歌舞伎座」誕生
1964(昭和39)	長堀川埋め立て完了、長堀通へ
1972(昭和47)	千日デパート火災
1997(平成9)	長堀通の下に地下街「クリスタ長堀」開業
2007(平成19)	現在の戎橋へ架け替え
2008(平成20)	「とんぼりリバーウォーク」太左衛門橋・相合橋間開通

粋(すい)なまちミナミをめざして！

ミナミはもともと、芝居、呉服、和装小物、飲食のまちでした。知識が豊富でお茶や着物を楽しむ船場の旦那がよそ行きの格好をして繰り出す格式高い場所。昭和初期の道頓堀行進曲が流れていた時代の雰囲気は特に粋なまち。「現在は客引きなどの迷惑行為もあるなど残念ながら粋の空間・精神が失われつつある」と今井さん。今井さんたちは、悪質な客引きや迷惑行為を減らし、安全・安心なまち、誰もが楽しめるミナミをめざし、商店街、地域住民、警察や行政が協力し、「みんなでつくろうええまちミナミ！」の声かけと共に、防犯パトロールを行っています。

ミナミの活性化をめざしたプロジェクトは、他にも盛りだくさん。髙島屋やなんばマルイが面する南海難波駅前では、ニューヨークのタイムズスクエアのように、自動車を排除し、歩行者優先の広場をつくろうとの構想があります。

ミナミでは、歴史的にも、大阪場所につながった大相撲の誘致など大きなイベントを誘致することで、まちを活性化してきた経緯があります。現在は、道頓堀川では開削400周年記念事業の目玉として、「道頓堀プール」が検討されています。また、今年で100周年を迎える戎橋筋商店街は、商店街各店の商品が詰まったギフト商品の企画など、100周年記念にあわせた取組みも予定されています。

道頓堀で飲食店を営む今井さん

難波駅前広場再整備計画イメージ図
提供：橋爪紳也さん